

Title	クオリアの志向化について
Author(s)	前田, 高弘
Citation	年報人間科学. 21 P.301-P.313
Issue Date	2000
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/4605
DOI	10.18910/4605
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

クオリアの志向化について

〈要旨〉

クオリアを自然化するための一つの有望な方法は、それを経験の表象内容に還元することである。それが、クオリアを志向化することであり、一般にその立場を表象主義と呼ぶが、本稿で私は、経験の透明性に基づいて、外在主義的な表象主義の立場を擁護したい。即ち、内在主義的な表象主義や反表象主義は、経験の透明性によって批判される。クオリアは、経験それ自体が持つ質でもなければ、経験によって表象される事物がそれ自体で持つ質でもなく、表象関係そのもののうちに存する本質的に関係的な質として捉えられなければならない。

キーワード

クオリア、経験の透明性、表象主義、志向性、外在主義。

前田 高弘

近年、意識の問題に対する関心の高まりに伴って、「クオリア」という言葉も大分普及したように見えるが、それでもまずその言葉の意味を確認することから話を始めなければならぬ。クオリアはしばしば、関連する心的状態（経験、感覚、夢など）が内在的 (intrinsic) にもつ性質として捉えられるか、あるいは、端的にセンス・データなどと同視されたりする。だからもし、そのような意味でのクオリアは存在しないと主張すれば、クオリアの存在自体を否定するものとして受け取られる恐れがある。だが、いわゆる「クオリア好き」を批判するような哲学者でも、「目の前に熟したトマトがあるのを見るとはどのようなことか」とか「コーヒーを味わうとはどのようなことか」といったことに関する現象的事実が存在することを否定しているわけでは決してない。もちろん、もしクオリアが、その概念の問題として、心的状態（ないし「心的空間」）に属する性質（ないし対象）以外のものではあり得ないとすれば、その哲学者は結局クオリアやそれに関する現象的事実を消去するか説明し去ることになるであろう（二元論に転向するという道もあるが）。しかし、以下で見るように、クオリアの概念がクオリアをそのように捉えることを要求すると考えるべき理由はないように思われる。そこで、議論のために、クオリアの形而上学的身分に関する特定の見解にコミットしないようなクオリアの大まかな定義が必要となるが、それは次のような仕方与えられると思う。即ち、それは特定の感覚様相を通じて直接感じることができ、かつその感覚様相に特有であるような質的特性である。例えば、熟したトマトの表面を見

ることに伴うクオリアとは、視覚によって直接アクセスできる特有の質、つまりその赤さであり、コーヒーを味わうことに伴うクオリアとは、嗅覚と味覚によって直接アクセスできる特有の質、つまりその味や香りである。要するに、伝統的に第二性質と呼ばれてきたものに関係する質であるが¹⁾、しかしその形而上学的身分に関する問題は、そもそもクオリアを色などと同視することの妥当性も含めて、以下の議論の一つの焦点となる。

表象主義の基本的な根拠…経験の透明性

クオリアを志向化するのは、それを経験の表象内容に還元することであり、そのようにしてクオリアの自然化を目指す立場を表象主義と呼ぶ。私は、一般に心を自然化する試みとしての表象主義的アプローチの有効性を信じる者であるが、表象主義はそれが採用する志向性の理論によつてその形態が異なり得る。志向性の理論が大まかに外在主義的なものと内在主義的なものとに分けられるのと同様、実際提案されている表象主義もその二種類に分けられる。私が有望視するのは外在主義的な表象主義の方である。というのも、私が思うに、表象主義を基本的に根拠づけるのは経験の透明性であり、そのように根拠づけられる表象主義は必然的に外在主義的な形態を取るからである。いずれにせよ、それを主張することが本稿における私の主な目的である。

経験が透明であるとは、赤いトマトを見るという視覚経験を例に

取れば、我々がその視覚経験そのものに対して内観的に注意を向けようと努めても、注意の矛先はその経験を透過して結局その赤いトマトそのものに突き当たってしまうということである。内観の一つのモデル、即ち、内観を知覚になぞらえるモデルによって述べれば、ポイントはより鮮明になろう。つまり、たとえば我々がそのような内的感覚 (inner sense) を持つとして、その感覚をその視覚経験に向けたとしても、経験は自分が表現する対象や質 (つまりそのトマトやその赤さ) を呈示するだけで、自分自身の姿 (それがあゝ種の神経状態であれ何であれ) を見せることは決してない。だから、我々には、赤いものを見ることに伴う特有のクォリア、つまりその赤さを、視覚経験ではなくトマトなどの事物に帰属させることが自然であるように思われるのである。このことは、クォリアが経験そのものの側にはなく経験によつて表象されるものの側に属すると考えるべき理由を与える。従つて、クォリアを経験的表象の理論によつて説明する道が開かれる。

しかし、間接的実在論やセンス・データ理論などが主張するように、我々が経験を通して直接アクセスする対象や質が、“頭の中”ないし“心の中”にしか存在し得ないという意味で内的で心的な存在者であるとする、我々はクォリアの問題について少しも前進していないことになる。しかし、経験 (つまり表象するもの) が頭の中にあるのは自明だとしても (だから眼を閉じれば今まで見えなかったものが見えなくなる)、それによつて表象されるものが頭の中にあるというのは決して自明ではない (脳外科手術を受けつつその様子を鏡を

通して見る場合を除けば)⁽²⁾。我々は外部世界に存在する事物 (これには物体としての我々の身体も含まれるだろう) とその質に対して認知的に直接アクセスすることができず、直接アクセスできるのは自分の心的空間の中にあるものだけだという考え方は、しばしば幻覚論法をその根拠としている。だが、何人かの哲学者が指摘しているように、赤いトマトを見るといふ真正の経験が、赤いトマトを見ていふように見えるという幻覚と区別することが当の経験主体の視点からはできないとしても、そのことから、それらの経験と幻覚において見られているものが同じであるということが論理的に帰結するわけではない。真正の経験を持つ限りにおいて我々は外部世界に対して直接アクセスできると主張することは論理的に可能である。また、幻覚の場合でも、その幻覚を説明するために、センス・データの特別な心的対象を指定しなければならないわけではない。経験が志向的对象を持つと同様に、幻覚も志向的对象を持つと言える。志向的对象の一つの大きな特徴は、それが現実には存在する対象である必要はないということだ。G.Harman [1960] が論じたように、青春の泉 (Fountain of Youth) は存在しないが、ポンセ・デレオンがそれを探していたからといって、それが心的な存在者になるわけではない。同じことが幻覚の志向的对象についても言える。それ故、真正の経験と幻覚との違いは、前者の志向的对象が現実には存在するものであるのに対し、後者のそれは現実には存在しないということに過ぎない。同様のことがさらに、心的イメージや夢などについても言えるだろう⁽³⁾。

しかし、一見表象とは思われないもの、即ち、残像、痛み、性的快楽などについてはどうだろうか。これらについても事情は同じである。あなたはそれらがどこにあるように感じられるかと問われれば、頭の中ではなく（頭痛の場合を除く）、視界の前方であったり、身体の内や表面の特定の箇所であったりするはずだ。それ故、それらはそこで生起しているものとして表象される質であるという主張は十分成り立ち得るだろう。（この主張に対する批判については後で触れる。）

我々は普段、自分が経験しているということを意識することなく、様々なものを見たり聞いたり触れたりしているという意味でも経験は透明であると言えるが、ここでの重要なポイントは、HermanやDorisらが指摘するように、たとえ我々が自分の持つ経験を意識する場合でも、我々が自覚できるのはその経験の志向的特性（即ち何を表象しているかということ）だけであり、経験の内在的特性に直接アクセスすることはできないということである。このポイントは、内観によって支持されるといふ長所をもっている。それが長所であるわけは、経験の持つ現象的性格についての我々の理解が専ら自身の経験についての内観に由来するものである限り、内観によって支持されるということは、表象主義がクオリアの説明として正しい方向を向いていることを強く示唆すると考えられるからである。もちろん、内観に訴えることは必ずしも哲学的に正しいやり方ではないが、それでも説得的な反論が提示されない限り、それは表象主義の強い理論的根拠となるだろう。

経験の透明性に基づく議論に対する批判

クオリアを経験の表象内容に還元することの根拠として、我々が内観的にアクセスできる現象的質は経験ではなく経験されるものに属する（厳密には属するものとして表象される）ことを前節で論じたが、ここで経験的表象のあり方について考える必要がある。センス・データなどに訴える論者は表象される事物の性質とその事物の表象の性質とを混同しているとHermanは批判するが、しかしそのような混同が生じる一つの要因は、経験に特有の表象のスタイルにあると考えられる。例えば、ユニコーンを表現するには、言葉でその特徴を記述するか、絵に描いてその姿を描写するかの二通りが典型的なやり方であるが、その二つの表現のスタイルは大きく異なる。言葉だけで記述する場合は、言葉（文字や音声）とユニコーンの間に類似関係が全くなくても表象関係は成立し得るが、絵とユニコーンの場合、何らかの（少なくとも同型写像的な）類似関係が両者の間に存在しなければ（少なくとも存在することが意図されてなければ）表象関係は成立しないだろう。視覚経験においてとりわけ、表象と表象されるものが混同されやすいのは、視覚経験の表象的スタイルが言葉よりも絵に近いからだと考えられる。Herman自身、ユニコーンを思い浮かべることとユニコーンの絵を思い浮かべることの区別に触れ、両者を混同すべきではないとしているが、ユニコーンの視覚的イメージが「ユニコーン」という文字のイメージよりもユ

ニコソンの絵のイメージの方に似ていることは否定できない。このことは、表象主義にとつて、表象と表象されるものとの区別を指摘するだけでは不十分であり、経験的表象の特性について考慮する必要があることを示唆している¹⁴⁾。

信原氏がBaribanの議論に触れている箇所であつた次のような例を考へてみよう。あなたは危険な作業現場の仕事モニターを使つた遠隔操作によつて行つてゐる。操作に慣れないうちはモニター画面に意識を集中するが、慣れてくるとモニター画面そのものを意識することはなくなり、あたかもその作業現場そのものを意識するように感じられてくる。しかし、あなたが直接見ているのはモニター画面であつて、作業現場ではない。

私は、この例が外在主義的な表象主義に対する反例として説得的であるとは思われないが、なぜ説得的でないかを説明することによつて、内在主義的な表象主義や反表象主義が抱える問題点を明らかにできると思ふ。

信原氏は、その例によつて、視覚経験が映像的な性質をもつといふ考え方そのものを問題視してゐるように見える。確かに、我々が直接見ているのは「頭の中のモニター画面」であるというのが仮に事実であつたとしても、最終的には「モニター画面を見る」というメタファーに頼らない仕方では視覚経験を説明する必要があるだろう（でないといふ無限後退に陥る）。だが、視覚経験の表象的スタイルが何らかの仕方では映像的であるといふ考え方そのものに問題はないように思われる。そのことは、当のモニター画面がどのように表象を行つ

ているかを考えれば明らかである。モニター画面は、画面を構成するたくさんの細かい画素のそれぞれが、各々に割り当てられた表象空間（射影幾何学的に二次元に変換されたものとしての）の特定の区画を表象することによつて、表象される事物の部分どうしの空間的位置関係を保存する仕方では表象する。実際、生理学的なデータから、人間の視覚もそのような仕方では表象すると思へられてゐる。また、百聞は一見に如かずという諺があるが、それは視覚的表象と文的表象のスタイルの違いに関する真理を述べていると言えよう。表象のスタイルが異なるということは、単に同じ志向的内容の表象の仕方が異なるということではない。映像と言葉では表象内容が全く同じではないのだ。一般に、形や距離や色などの性質に関しては、映像は言葉よりも表象内容が豊かである。言葉は、それらの性質に関するキメの細かい情報を抽象化してしまふからだ¹⁵⁾。だから、ユニコーンを表現するには大抵言葉よりも絵の方が効果的である。

信原氏は、視覚経験が映像的な性質を持つのを認めることは直ちに、意識への現象的立ち現れを物理的なものとは異質の基礎的存在者として認めることにつながると考へてゐるようである。彼が、「物理的世界一元論」を貫くために、Dennettを引き合いに出して経験的映像の性格を消去しようとするのもそのためであらう¹⁶⁾。しかし私には、映像的性質を消去せねばならぬ理由は見当たらない。映像的性質を認めることがなぜ、特殊な存在者としての現象的立ち現れを認めることになるのだろうか？ 信原氏は、外界の事物そのものが意識に現れるように思われる知覚においても、意識に現れるのは

外界の事物そのものではないということを、二重視の例を挙げて述べている。だが二重視の例は、我々が真正の視覚経験において直接アクセスするものが外界の事物とは別のものであることを示してはいない。二つの眼球は一定の間隔を置いて並んでいるため、同一の事物を互いに少し離れた視点から捉えることになる。だから、我々は常に二つの視点から事物を眺めていると言える。このことが両眼視差を生み、立体視を可能にするのだが、二重視はこの立体視のメカニズムの副産物に過ぎない。つまり二重視は、我々が左右の視点から得られる二つの視覚表象を持つこと（この事實は立体視が生じているときにも成り立つことに注意せよ）を明らかにするが、我々がその二つの視点から直接アクセスするものが外界の事物そのものではないことを示すわけではない。それは、一つの事物を異なる視点から眺めた二つの表象があるとき、それらの表象によつて表象されるものを当の事物とは別のものとして措定しなければならぬわけではないのと同じことだ。措定しなければならぬと考える人は、表象そのものと表象されるものとを区別し損なっているのだらう。信原氏はその区別に決して鈍感ではないが、十分に敏感でもないように思われる。

実際、視覚経験が映像的な性格を持つことは、モニター画面の例がまさに物語っていることである。モニター画面の映像を作業現場そのものと混同することが可能であるのは、視覚経験とモニター画面の表象的スタイルが似ているからこそであらう。信原氏は内在主義的な表象主義の立場をとるが、彼の立場ではモニター画面の例が

そもそもなぜ可能であるのかを十分に説明できないように思われる。というのも、彼が採用する志向的内容の理論は結局のところ概念的役割意味論 (conceptual role semantics) であるが、この理論は視覚経験が持つ志向的内容と信念などの命題的態度が持つ志向的内容との違いを説明しないからである（あるいは、目の前に赤いトマトがあるのを見ることと「目の前に赤いトマトがある」と信じることに間に本質的な違いはないと主張するのだろうか？）。彼は、志向的内容には表象されるものだけではなく表象の仕方も関係してくると述べているが、経験的表象の場合のその「仕方」とはどのようなものであるのかを十分に説明していない。そして、もしそれを十分に説明しようとするならば、表象内容に還元されないものとしてのクオリアをこっそり（あるいはうっかり）持ち込むことにならないと限らないだらう。

次に、反表象主義者による批判の検討に移りたい。私がここで反表象主義と呼ぶ立場は、クオリアが経験の表象内容に還元されることを否定するものである。しかし、物理主義的な存在論は表象主義者と共有するから、センス・データのような特殊な心的存在者を要請したりはしない。だから、「経験」という言葉は、この立場においても、頭の中に生起するある種の神経状態を指すことになる。表象主義との違いは、クオリアをその神経状態の内在的な性質として捉えることにある。それ故、上述の経験の透明性に基づく議論に対しては当然反対しなければならぬ。そして、実際にいくつかの反論が

提示されているのだが、この立場に対する私の根本的な懸念は、仮にそれらの反論が正しいとしても、反表象主義者の擁護するクォリアとは一体何であるのかよく分からないということである。ここではそのことだけを強調したい⁸⁾。

経験の透明性に基づく議論のポイントは、我々が経験において直接アクセスする現象的質は、経験それ自体ではなく経験によって表象されるものに属するということであつた。そして、そのポイントは我々の内観によつて支持されるということも前に述べた。そのポイントに反対することは、クォリアは表象されるものの側ではなく表象するものの側（即ち経験）に属すると主張することであり、そのためには我々の内観がミスリーディングであることを論証せねばならない。上述のモニター画面の例は論証とまではいかないが、我々の内観の信憑性を疑つてみる契機にはなる。もし、その例が示唆するように、我々は“頭の中のモニター画面”（つまり視覚経験に属する性質を表象されるものに属する性質と混同しているというのが事実であるとすれば、クォリアは云わば“心的絵の具”のようなものであると考えられる。つまり、ユニコーンの絵に使われる絵の具がユニコーンではなくその絵に属するのと同様に、赤いトマトのその赤さは、その赤いトマトを表象する視覚経験に属する心的絵の具の特性である。少なくとも、それが反表象主義者の言うクォリアの一つの可能な解釈である。

反表象主義者の言うクォリアをそのように解釈すると、彼らの主張は結局投影主義 (projectivism) に基づくエラー理論の一変種であ

るように見えてきてしまふが、しかし、クォリアをそのように捉えることはやはり間違ひであるように思われる。絵の具のアナロジーをもう一度考え直してみよう。トマトの赤さを表現する手段として、「赤い」という言葉と、赤い絵の具とがある。この二つの表現手段の大きな違いは、「赤い」という言葉が赤色である必要はないのに対し、赤い絵の具は赤色でなければならぬ、という点にある。恐らく我々をミスリードするのは、その絵の具の赤さである。赤い絵の具のその赤さがその絵の具に属するのは、赤いトマトのその赤さがそのトマトに属するのと同じことではない。赤いトマトの絵を見るときの視覚経験によつて表象されるのは当然赤いトマトの絵である。だが、赤いトマトの絵はそれ自体赤いトマトの表象でもある。だから混乱が生じる。モニター画面の例はまさにその混乱に付け込むものである。つまり、ミスリーディングであるのは、現象的質（クォリア）は表象するものではなく表象されるものに属するという内観的判断ではなく、内観とは逆の判断へ誘うモニター画面や心的絵の具の比喩の方である。それ故、Harrimanが次のように言うのは正しいと言える。即ち、我々は、ユニコーンの絵の具に注意を向けるのと同じ仕方、視覚経験の“心的絵の具”に注意を向けることができるわけではない。

このようにクォリアを心的絵の具として捉える見方はあまりにも簡単に反駁されてしまうため、本当にそれが反表象主義者の言うクォリアであるのか私には確信がない。しかし、代表的な反表象主義者である N. Block [Forthcoming] は実際に、「心的絵の具」ないし

「心的インク」といった言い回しを用いている。彼によれば、「心的絵の具」とは、表象されるのではなく表象するクオリアのことであるから、上述の解釈は全く的外れでもないように思われる。少なくとも、その言い回しはあまり適切ではないと言ふことはできるだろう。

Blockが言うように、表象主義と反表象主義との間の争点は、経験にはその表象内容によつては尽くされない何か心的なものがあるかという問題にかかっている。反表象主義者は、そのような何か心的なものがあると主張するのだが、それが心的であるためには、少なくとも内観的に直接アクセスできるような質でなければならぬと考えられる。だが、我々が経験において直接アクセスする質は、その形而上学的身分がどうであれ、神経状態そのものが持つような質ではないことは確かである。そのことは、表象とは一見関係なさそうに見える残像や性的快楽に関する経験についても当てはまる⁽⁹⁾。Blockはそれらを、何も表象しないクオリアとして、「心的フォント」と呼んでいるが、しかし、我々は紙に印刷された文字のフォントに注意を向けるのと同じ仕方、自身の頭の中に生起している神経状態の“フォント”に注意を向けることができるわけではない。それらの経験において我々がまずもつてアクセスする現象的質は、視界の前方や下半身の特定の位置に存在するはずであり、そのことは、たとえ我々が神経科学の豊富な知識を獲得したとしても変わることはないのである。確かに、Blockが要求するように、もし残像や性的快楽などが表象と関係するのであれば、それは一体どのような表象

であるのかを表象主義者は具体的に説明する義務がある。私が有望と見なす表象の理論は進化論的な生物学的機能に基づくものであるが、ここではそれについて詳しく論じる余裕はない。ただ私がここで言いたいのは、もしBlockが言うように、表象とは無関係の端的に心的状態の内在的な性質であるようなクオリアが存在するのであれば、それはどのような意味で心的であると言えるのかを十分納得できるような仕方で説明する義務を彼は負うということである。

クオリアの形而上学的身分

クオリアを巡る議論において、経験そのものに属する性質と経験によつて表象される性質とが頻繁に混同されるのは、まさに経験の透明性の故であると解釈できる。表象の例として通常挙げられる言葉や絵などは、志向的存在者である我々がそれを使ってそれとは別のものを表現するための媒体である。それ故、我々は表象一般について、我々が直接アクセスするのは表象媒体であつて、表象される対象や質ではないと考える傾向があるのかもしれない。だが、経験は媒体を介さない表象であり、まさにそのことが経験という表象の特質を成している⁽¹⁰⁾。そして、経験の透明性も結局は、経験が無媒体的な表象であることに由来するのである。

しかし、我々が経験において直接アクセスする現象的質が経験によつて表象される事物の質的特性と同一であるとすれば、その現象的質の形而上学的身分が問題になる。なぜなら、もし我々が事物に

帰属させている現象的質が自然の中に位置づけることが不可能であるような性質であるとしたり、外在主義的な表象主義は結局クォリアの自然化に失敗することになるからだ。

そもそもクォリアが哲学的な興味を引くのは、それが見かけ(事物が我々に対して現れる仕方)と実在事物が我々の認識とは独立に在る(仕方)の区別の基礎にあると考えられるからである。それ故、クォリアが第二性質と密接な関係にあるのは偶然ではない。DretskeやTypeのような外在主義的表象主義者は、そのことを十分考慮せずにクォリアを第一性質に同化させてしまっている嫌いがある。彼らは、各々が採用する表象の理論は異なるが、経験において表象される質がある種の客観的な物理的性質である点で一致する。だから、例えば、色は物体の表面(ないしそれが反射する光)が持つある種の物理的特性に還元されるし、痛みは体の特定の箇所に生起しているある種の物理的状态に還元されることになる。だが、このような還元の問題点を端的に言い表せば、それらは我々が経験において直接アクセスする色や痛みとは似ても似つかないということである。既に述べたように、基本的に表象主義を動機づけているのは、経験の透明性に関する我々の内観的判断であり、その内観を通して我々が直接アクセスできるのは端的に色や痛みなどであるから、表象主義者としては出来る限りその内観を尊重する方向で、クォリアを自然の中に位置づけることを試みるべきである。

しかし、そんなことが本当に可能なのだろうか？ 私は、クォリアをある種の内在的な性質として捉える見方を放棄するならばそれ

は可能だと思う。クォリアを何らかの事物が内在的にもつ性質として捉える傾向は、外在主義的表象主義者と反表象主義者の両方に見られるものである。両者の違いはただ、クォリアの属する場所にある。前者は、経験がそこにあるものとして表象する場所にそれは属すると言ひ、後者は、当の経験自体にそれは属すると言ひ。だが、クォリアは、経験自体と経験によつて表象されるものとのどちらか一方に属するのではなく、その両者の関係において成立する特性として捉えることができるように思われる。即ち、クォリアはそれ自体は本質的に関係的な特性であるが、経験においては表象される事物が内在的に持つものとして表象されるような性質である。だから、経験は、本質的に関係的であるものを、あたかも事物の内在的な性質であるかのように表象するという点において、我々を欺くものであると言えなくもない。(それ故、この見解はエラー論者の直観を部分的に取り込んでいる。)

もし表象内容というものが、当の認識主体の関連する感覚器官の特性とは独立に個別化可能であるような事物と性質のみによつて構成されなければならないとしたら、クォリアはその内容の中に入ることができないだろう。しかし、表象主義のポイントが、クォリアを経験そのものではなく、経験によつて表象されるものに属する性質と見なすことにある限り、私の考え方は依然として表象主義の精神に沿っている。即ち、クォリアはあくまで事物が内在的に持つものとして表象される性質である。ただ、私の見解では、ある意味では驚くべきことに、トマトは人間のような特定のタイプの知覚者に

よって見られている限りにおいて赤いことになる。つまり、トマトの表面の物理的特性は、それ自体では赤色を構成しない。だからといって、その赤色は知覚者の脳の中にあるわけでもない。それは、知覚者とその志向的对象であるトマトとの間の表象関係の中にあるとしか言いようがないものだ。

知覚に関する基本的な直観、即ち、事物が知覚を通して我々に与えられる仕方には、当の事物が持つ性質だけでなく、我々の知覚のあり方そのものも寄与している、という直観が反表象主義者を動機づけているとすれば、その動機は尤もなものであるⁱⁱ⁾。しかし、彼らはクォリアを経験的状态そのものに属する性質と見なすことによつて、彼らが批判する外在主義的表象主義者とは逆の仕方と同じ誤りを犯していると言える。即ち、クォリアを我々が直接見知っているクォリアとは別のものに還元しようとする誤りである。なぜそれが誤りであるかといえば、クォリアは本質的に関係的な特性であるために、それを何らかの内在的な特性と同一視することは必然的にその本性を捉え損なうことになるからである。だから、クォリアが何かに還元されるとすれば、その何かは、経験それ自体と経験によつて表象されるものとの間に成り立つ表象関係そのものである。そして、この表象関係そのものは、私の見解では、進化論的な生物学的機能に基づく表象の理論によつて自然化される。それ故、クォリアを自然化するという目標にとつて、それを何らかの内在的な物理的性質に還元しなければならぬ理由はない。むしろクォリアを説明し去るのではなく説明するためには、表象関係のようなものに還元

するしかなく、それは結局、志向性そのものの問題に行き着くことになると思われる。

注

(1) 形などの第一性質に關係するクォリアは存在しないのだろうか？ この問題は以下の議論の論点に直接には影響しないから、否定も肯定もしないでおきたい。ただ私は、仮に色や音などのクォリアと並んで形や距離などのクォリアが存在するとしても、それらの間には本質的な違いがあると考へている。cf. Smith [1991].

(2) 私はここで、経験によつて表象されるものを、経験によつて我々が直接アクセスできるものと同一視している。だが、間接的實在論などによると、表象されるものは外部世界にあり、我々は間接的にしかそれにアクセスできないと言ふことができる。しかしここではむしろ、経験によつて表象されるものと、我々が経験において直接アクセスするものとが異なるという考へ方そのものが問題になつてゐる。

(3) 存在しないものについて考へることは不自然でないのに、存在しないものを見るということにはある種の不自然さが伴う(人によつては前者も不自然だと感じるかもしれないが、不自然さの質が異なる)。即ち、何かを見ている限り、その見られているものは何らかの仕方で存在しなければならぬと考へる傾向が我々にはあるようである。私が思うに、これは経験的表象の特質である。無媒体性(これについては後でまた触れる)に由来するのではないだろうか。即ち、言葉や絵のような媒体的な表象のモデルを無意識のうちに経験に当てはめてしまつてゐるためにそのような錯覚が生じると考へられる。例えば、ユニコーンの絵の場合、その架

空の動物と認識主体との間の表象関係は、その絵によって媒介されているが、ユニコーンの幻覚の場合も、ユニコーンと認識主体との間に何か媒介するものがなければならぬと考えてしまうのである。あるいは単純に、本能的に我々は経験を通して直接アクセスできるものを全て実在のものとして扱うようにできているだけのことかもしれない。

- (4) 実際、Robinson[1998]は、表象と表象されるものとを区別するだけでは、例えば「前方に木がある」という志向的内容を信念状態と視覚状態が共に持ち得るとき、それらの状態の現象的な違いを説明できないとしてHarmanを批判し、心的状態の内在的な性質としてのクォリアを擁護している。

- (5) この論点は、視覚以外の感覚様相に関する性質(音や味など)についても当てはまる。

- (6) 因に、彼のその議論は説得力を欠くように思われる。色彩ファイ現象が映像的補充を必要としないというのが正しいとしても、そのことが何故、視覚経験が一般に非映像的であることの証明になるのか私には理解できない。

- (7) この種の議論はBoghossian, P.A. & Velleman, J.D.[1989]にも見られる。また、その種の議論に対する効果的な批判をClark[1996]が与えている。

- (8) 外在主義的な表象主義に対する反表象主義者の典型的な反論は色のスペクトル逆転に関する例を持ち出すものであるが、これについては準備中の別の拙論で扱っている。

- (9) 痛みの経験は表象であるという主張は、残像などと比べると直観的により受け入れやすいのではないだろうか。何の傷害もない手に痛みを感じるとき、ある意味ではそれは誤りでも幻覚でもないが、しかし、それは誤りか少なくとも幻覚であると言える意

味も確かにあるように思われる(手にものすごい痛みを感じているのに、手には物理的に何も問題はないなどと医者に言われれば誰でも驚くだろう)。痛みの帰属の正しさに関するこの曖昧さは、多分、痛みに対する我々の関心のあり方を反映するものである。例えば、手にものすごい痛みがある限り、たとえ幻覚であっても我々はそれを放っておくことができない。これと同じような指摘がSchoemaker [1994] pp.32ff.にも見られる。

- (10) 言葉や絵などの媒体的な表象は、無媒体的な表象である経験に依存することによって何かを表象し得ると考えられる。

- (11) この動機はSchoemakerに顕著に見られる。しかし彼は、クォリアをあくまで心的状態の内在的な性質として捉え、客観的な物理的性質としての色などと区別している。

文献

- Block, Ned, forthcoming, "Mental Ink", in a volume of essays on Tyler Burge.
http://www.nyu.edu/gsas/dept/philo/faculty/block/papers/MentalInk.html
Boghossian, P.A. & Velleman, J.D. 1989, "Colour as a Secondary Quality", *Mind* 98, 81-103.
Clark, Austen, 1996, "Three Varieties of Visual Field", *Philosophical Psychology* 9, 477-495.
Dretske, Fred, 1995, *Naturalizing the Mind*, Cambridge: MIT Press.
Harman, Gilbert, 1990, "The Intrinsic Quality of Experience", *Philosophical Perspectives* 4, 31-52.
信原幸弘, 「意識と機能主義」, 『目的論的機能主義に基づく心の自然化』, pp.25-41. 平成10年

- Robinson, William S.,1998, "Intrinsic Qualities of Experience:Surviving Harman's Critique", *Erkenntnis* 47,285-309.
- Shoemaker,Sydney,1994, "Phenomenal Character", *Nous* 28:1,21-38.
- Smith,A.D.,1990,"Of Primary and Secondary Qualities", *Philosophical Review* 99,221-254.
- Tye, Michael,1995, *Ten Problems of Consciousness*, Cambridge:MIT Press.

On Intentionalizing Qualia

Takahiro MAEDA

A hopeful way of naturalizing qualia is to reduce them into the representational content of experience. This is called the intentionalization of qualia or representationalism. In this paper I defend externalistic representationalism by referring to the transparency of experience. So, internalistic representationalism and anti-representationalism are criticized on the basis of the transparency of experience. Qualia are neither intrinsic quality of experience nor intrinsic quality of objects represented by experience, but are essentially relational quality consisting in representational relations themselves.

Key words

qualia, transparency of experience, representationalism, intentionality, externalism